

4/5 Fri.

第637回 定期演奏会  
サントリーホール 19時開演  
SUBSCRIPTION CONCERT No.637 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor Laureate  
ヴァイオリン  
Violin  
コンサートマスター  
Concertmaster

マルティヌー  
MARTINŪ

バルトーク  
BARTÓK

[休憩]  
[Intermission]

メシアン  
MESSIAEN

シルヴァン・カンブルラン (桂冠指揮者) -p.4  
SYLVAIN CAMBRELING

金川真弓 -p.6  
MAYUMI KANAGAWA

林 悠介  
YUSUKE HAYASHI

リディツェへの追悼 H. 296 [約8分] -p.8  
Memorial to Lidice, H. 296

ヴァイオリン協奏曲 第2番 BB117 [約36分] -p.9  
Violin Concerto No. 2, BB117  
I. Allegro non troppo  
II. Andante tranquillo  
III. Allegro molto

キリストの昇天 [約28分] -p.10  
L'Ascension  
I. 父なる神に栄光を求めるキリストの威厳  
II. 御国を待ち望む魂の静謐なアレルヤ  
III. トランペットのアレルヤ、シンバルのアレルヤ  
IV. 父なる神の元に昇るキリストの祈り

4/26 Fri.

第671回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No.671 / Suntory Hall 19:00

4/28 Sun.

第133回 横浜マチネーシリーズ  
横浜みなとみらいホール 14時開演  
YOKOHAMA MATINÉE SERIES No.133 / Yokohama Minato Mirai Hall 14:00

指揮  
Principal Conductor  
ヴァイオリン  
Violin  
コンサートマスター  
Concertmaster

ブラームス  
BRAHMS

コルンゴルト  
KORNGOLD

[休憩]  
[Intermission]

ベートーヴェン  
BEETHOVEN

セバスティアン・ヴァイグレ (常任指揮者) -p.5  
SEBASTIAN WEIGLE

ロザンネ・フィリップス -p.6  
ROSANNE PHILIPPENS

林 悠介  
YUSUKE HAYASHI

大学祝典序曲 作品80 [約10分] -p.12  
Academic Festival Overture, op. 80

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35 [約24分] -p.13  
Violin Concerto in D major, op. 35  
I. Moderato nobile  
II. Romance: Andante  
III. Finale: Allegro assai vivace

交響曲 第4番 変ロ長調 作品60 [約34分] -p.14  
Symphony No. 4 in B flat major, op. 60  
I. Adagio – Allegro vivace  
II. Adagio  
III. Allegro vivace  
IV. Allegro ma non troppo

指揮

**シルヴァン・カンブルラン**  
(桂冠指揮者)SYLVAIN CAMBRELING,  
Conductor Laureate鬼才カンブルランが  
20世紀音楽を振り  
鮮烈な響きを生む

©Marco Borggreve

色彩の魔術師カンブルランが、得意とするメシアン作品をメインに3つの20世紀の傑作を指揮し、カラフルかつ繊細な音響空間を築きあげる。

1948年、仏アミアン生まれ。2010年から9年間、読響常任指揮者を務め、17年11月にはメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉を指揮した演奏がサントリー音楽賞を受賞。19年4月から桂冠指揮者の任にある。22年12月には、一柳慧の新作やヴァレーズ〈アルカナ〉などを指揮した演奏が文化庁芸術祭大賞を受賞。

バーデンバーデン&フライブルクSWR響の首席指揮者、ベルギー王立モネ歌劇場、フランクフルト歌劇場、シュトゥットガルト歌劇場の音楽総監督などを歴任。クラシック音楽界の既存の概念にとらわれず、常に柔軟かつ斬新な発想で数多くのプロジェクトを成功へと導いた。現在はハンブルク響の首席指揮者、クラゲフォルム・ウィーンの名誉首席客演指揮者、ドイツ・マイنتスのヨハネス・ゲーテンベルク大学指揮科の名誉教授を務めている。これまでにウィーン・フィル、ベルリン・フィル、パリ管、ロサンゼルス・フィル、サンフランシスコ響、モントリオール響、ベルリン・ドイツ響、ミュンヘン・フィル、ウィーン響など一流楽団に客演。オペラでは、メトロポリタン歌劇場、パリ・オペラ座などに出演し、ザルツブルク音楽祭、ルール・トリエンナーレなどでも活躍。録音も数多く、SWR響との《メシアン／管弦楽作品全集》は、一人の指揮者と同一の楽団による世界初の全集として、欧州の主要な音楽賞を総なめにした。読響と共演したメシアン〈アッシジの聖フランチェスコ〉、マーラーの交響曲第9番のCDも好評を博している。

指揮

**セバステアーン・ヴァイグレ**  
(常任指揮者)SEBASTIAN WEIGLE,  
Principal Conductor就任から6シーズン目  
充実期を迎えた名匠が  
奏でる豊潤なサウンド

ドイツの名匠ヴァイグレが、得意のドイツ音楽からベートーヴェンなどを取り上げ、確かな音楽づくりによる豊潤なサウンドで会場を包み込む。

1961年ベルリン生まれ。82年にベルリン国立歌劇場管の首席ホルン奏者となった後、巨匠バレンボイムの勧めで指揮者へ転身。2003年には、ドイツのオペラ雑誌『オーパンヴェルト』の「年間最優秀指揮者」に選ばれ注目を浴びた。04年から09年までリセウ大劇場の音楽総監督を務め、評判を呼んだ。08年から23年までフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めた。在任期間中に、同歌劇場管が『オーパンヴェルト』誌の「年間最優秀オーケストラ」に、同歌劇場が「年間最優秀歌劇場」に度々輝くなど、その手腕は高く評価された。

読響には16年8月に初登場し、19年から第10代常任指揮者を務めている。近年もメトロポリタン歌劇場で〈ボリス・ゴドゥノフ〉、ウィーン国立歌劇場で〈ダフネ〉、バイエルン国立歌劇場で〈影のない女〉〈ローエングリン〉を指揮するなど、国際的な活躍を続ける。23年7月には、フランクフルト歌劇場の音楽総監督としての最後の公演でルディ・シュテファン〈最初の人類〉を振り、大きな話題を呼んだ。今年3月にはベルリン・ドイツ・オペラで〈スペードの女王〉を振り、好評を博した。これまでに、パイロイト音楽祭、ザルツブルク音楽祭に出演したほか、ベルリン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラなどに客演。ベルリン放送響、ウィーン響、フランクフルト放送響などの一流楽団とも共演を重ねている。

4/5  
定期

Artist



©Victor Marin

ヴァイオリン

**金川真弓**

MAYUMI KANAGAWA, Violin

音楽への飽くなき探求心と、豊潤かつ深い音色で国際的に活躍する実力派。ドイツ生まれ。ニューヨーク、ロサンゼルスを経て、現在はベルリン在住。ハンス・アイスラー音楽大学でブラッハーに師事。2019年チャイコフスキー国際コンクール第4位、18年ロン＝ティボー国際コンクール第2位入賞及び最優秀協奏曲賞を受賞。ベルリン・コンツェルトハウス管、ロイヤル・フィル、ドイツ・カンマーフィル、フィンランド放送響、マリンスキー劇場管などと共演。藤田真央、小菅優との共演など、室内楽にも積極的に取り組んでいる。『リサイタル (RECITAL)』をエクストン・レーベルよりリリース。読響とはヴァイグレ指揮で21、23年に共演し、絶賛された。使用楽器は、日本音楽財団貸与のストラディヴァリウス「ウィルヘルミ」（1725年製）。

4/26  
名曲4/28  
横浜マチナー

Artist

欧州で注目を浴びるオランダを代表する名手。1986年アムステルダム生まれ。フライブルク国際コンクールなどで優勝。ネゼ＝セガン、デ・フーント、M. ウィグルスワースらの指揮で、ロイヤル・フィル、ロッテルダム・フィル、ハーグ・レジデンティ管、BBCスコティッシュ・フィル、リヨン国立管、バルセロナ響などと共演。今年3月にはバーミンガム市響と初共演した。室内楽でも活躍しており、アムステルダム・コンサートヘボウ、ベルリン・フィルなどで演奏するほか、自身のコンサートシリーズ「アムステルダム・サロン」を企画運営している。CDをチャンネル・クラシックス、カプリッチョなどからリリース。使用楽器は、エリス・マチルデ財団から貸与された1727年製ストラディヴァリウス「バレーレ」。読響初登場。



©Marco Borggreve

ヴァイオリン

**ロザンネ・フィリップpens**

ROSANNE PHILIPPENS, Violin

## マルティヌー リディツェへの追悼 H. 296

1938年から39年にかけて、ドイツはチェコスロヴァキアをじりじりと追い詰め、最終的に解体し、事実上、併合してしまった。パリにいたボフスラフ・マルティヌー（1890～1959）夫妻はあるとき、故郷を蹂躪したナチスのブラックリストに、自分たちの名前が掲載されたことを知る。

着の身着のままで街を離れたふたりは、リモージュを経てエクサン・プロヴァンスへ。やっとの思いでビザを手にし、なんとか辿り着いたリスボンで汽船に乗った。ニューヨークに到着したのが1941年3月31日。パリを出てから9か月以上が経過していた。

望郷の想いを募らせながら、新天地で交響曲作家として地歩を固めつつあった42年、マルティヌーの耳に恐ろしい知らせが飛び込む。ドイツ占領軍がブラハの北西20kmほどに位置する小村リディツェを襲い、家を焼き、200人の男性を殺し、300人の女性と子供を捕らえ、その村をボヘミアから消し去ったという。亡命チェコ政府パラシュート部隊によるドイツ軍将官爆殺事件（エンストラポイド作戦）への報復攻撃だった。

1943年、アメリカ作曲家連盟が、第二次世界大戦の諸事件を表現する音楽作品を、18人の作曲家に委嘱した。マルティヌーはそれに応え同年8月初旬、故国での悲劇を題材に管弦楽曲〈リディツェへの追悼〉を書き上げた。

作品は切れ目なく続く3つの部分からなる。「アダージョ」では、聖歌〈怒りの日〉（または〈聖ヴァーツラフのコラール〉末尾）を思わせるメロディーを変形しつつ繰り返した後、蛇行する音型の静かな部分を置く。「アンダンテ・モデラート」でも蛇行する音型を受け継ぎ、長調に移旋して束の間の安息を得る。やがて「アダージョ」に戻り、フォルテの総奏の中、ホルンがベートーヴェンの第5交響曲の「運命動機」（第二次世界大戦中、「勝利」を示すサインとして英国放送協会が使用した）を吹き鳴らす。楽想は長調に傾き、静かに曲を閉じる。 〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1943年／初演：1943年10月28日、ニューヨーク／演奏時間：約8分  
楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、銅鑼）、ハープ、ピアノ、弦五部

## バルトーク ヴァイオリン協奏曲 第2番 BB117

オーストリア＝ハンガリー二重帝国に生まれたベラ・バルトーク（1881～1945）は、創作上もつねにその「二重性」と向き合い続けなければならなかった。1899年の音楽学校進学の際も、ウィーンとブダペスト、どちらの王都に向かうか迷ったという。

ブダペスト音楽院在学中には、ドイツ系音楽の影響をもろに受けながら、生活や考え方は祖国ハンガリーを強く意識したものへと変化させる。独立運動に参加し、民族衣装を着用して、家庭ではハンガリー語を話した。

こうした「二重性」の軛からバルトークを救い出す役目を果たしたのが、民俗音楽の研究だ。作曲家ゾルターン・コダーイとの共同研究は1906年、『ハンガリー民謡集』として実を結ぶ。ブダペスト音楽院教授、次いで科学アカデミー研究員の職を得てからは、民俗音楽の研究と、それを西欧作曲書法の中に溶かし込む作業とに、いっそう腰を落ち着けて取り組むことが可能になった。

1938年に完成させたヴァイオリン協奏曲第2番も、バルトークが「二重性」に向き合った末に導き出した答えのひとつだ。ドイツで培われたソナタ形式や変奏曲といった旧来の書法と、ハンガリーの民俗音楽、さらには同時代の前衛音楽までもその懐に取り込み、作品内で止揚する。

**第1楽章** 独奏ヴァイオリンの奏でる第1主題は、ハンガリーの募兵の音楽「ヴェルブンコシュ」を思わせる五音音階。主題の中程には順次進行で上下行する滑らかな楽句が現れ、五音音階と対照をなす。続く第2主題には12音すべてが顔を出す。やがてそれは、四分音（半音の半分）にまで細分化される。

**第2楽章** 民謡風の主題のあと6つの変奏が続き、楽章冒頭に提示された主題に戻る。

**第3楽章** 登場するテーマにはいずれも、第1楽章の各主題がこだまする。活気から野生味、優美さから素朴さへと楽想を変化させながら、最後は独奏ヴァイオリンの妙技を生かし、華麗に終える。 〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1937～38年／初演：1939年3月23日、アムステルダム／演奏時間：約36分  
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、小太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、銅鑼）、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

メシアン  
キリストの昇天

〈キリストの昇天〉は今日、オリヴィエ・メシアン（1908～92）の代表作のひとつとされる。作曲家がこの作品を書き上げたのは1933年、24歳のときだ。「移調の限られた旋法」（後述）を土台に、長短調から離れた新しい響きを模索する姿勢は、この作品にすでにあらわれ、以後、この作曲家の創作原理のひとつとなっていく。「若書き」とはいえ〈キリストの昇天〉には、メシアン作品のエッセンスが凝縮されている。

作曲家はこの曲の基礎をなす音楽理論を、パリ音楽院、とりわけモーリス・エマニュエルの音楽史のクラスで得た知識と、その後の継続した研究によって構築する。エマニュエルは古代ギリシャ、中東、インドの旋法やリズムを学生たちに説いた。メシアンはその知見により、「移調の限られた旋法」を見つけ出していく。

キリスト教的な題材の採用は作曲当時のポスト、教会オルガニストという立場から生じたと言ってもよい。事実、管弦楽曲〈忘れた捧げもの〉（1930年）や〈聖体への讃歌〉（32年）、オルガン曲〈主の降誕〉（35年）など、この時期の作品に占める宗教曲の割合は高い。

ここで「移調の限られた旋法」に触れておこう。旋法とは音階理論を指す。我々に馴染みがあるのは長音階（ドレミファソラシ）や短音階（ラシドレミファソ）だ。他に、教会で第1旋法とされるドリアン・モード（レミファソラシド）などが有名かもしれない。また、都節音階（ミファラシド）や琉球音階（ドミファソシ）といった五音音階も、旋法の一つである。

こうした音階では、各音の相対関係を固定した上で、12音すべてを開始音にして自由に移高し、相互に使用音の組み合わせの異なる「12調」を作ることができる。メシアンは独自の研究を通して、自由に移高できない旋法があることを発見した。

たとえば、「ハ・変ニ・変ホ・ホ・嬰ヘ・ト・イ・変ロ」の音階を半音ずつ上に移していくと、3度目の移高で最初と同じ使用音の音階が生じてしまう。つまり、この旋法は3つしか「調」を持たない。「ハ」で始まる1番目の音階と「変ホ」で始まる4番目の音階は、中心音が変わったはずなのに使用音が一致しているので、どれが中心音か分からなくなるのだ。メシアンはこうした音階を「移調の限られた旋法」

とし、相対関係が等間隔である全音音階と半音音階を除いて、それが7種類しかないことを突き止めた。なお、メシアンはここに挙げた「ハ・変ニ・変ホ……」を、「移調の限られた旋法」第2番としている。

こうした旋法を作品に使用するのにはいくつか理由がある。音楽面で言えば、中心音の希薄さによって旧来の長短調の音楽から距離を置くため。中心音が曖昧あいまいなので、和音の連結にも機能が生じにくい。神学面も無視できない。すぐに同じ姿に戻る音階は、十字架の死から復活するキリストを象徴しているように取れる。さらに、人間には操作不能な領域をそこに見ることもできる。これらの旋法の持つ不可能性は、神のわざを表している。こうした形而上・形而下の両様から、メシアンは「移調の限られた旋法」を解していたことがうかがえる。

**第1楽章「父なる神に栄光を求めるキリストの威厳」** コラール風に楽句を区切りながら進む。金管楽器のサウンドは教会の響きを思わせる。「移調の限られた旋法」第2番・第3番を用いている。

**第2楽章「御国を待ち望む魂の静謐なアレルヤ」** 同じ動きの総奏のあと、管楽器間をメロディーが何度も行き来する。このふたつの楽想が交互に現れる。「移調の限られた旋法」第3番・第7番とグレゴリオ聖歌を使用する。

**第3楽章「トランペットのアレルヤ、シンバルのアレルヤ」** トランペットのファンファーレで始まる。シンバルのトレモロが聴こえる部分が続く。小さい楽句を各パートで受け渡ししながら積み重ねていく場面を経て、楽章を終える。

**第4楽章「父なる神の元に昇るキリストの祈り」** 弱音器をつけた弦楽器のみで演奏する。その上、コントラバスを欠くので、浮遊感が強調される。「移調の限られた旋法」第7番を用いる。

〈澤谷夏樹 音楽評論家〉

作曲：1932～33年／初演：1935年2月9日、パリ／演奏時間：約28分  
楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン）、弦五部

4/26  
名曲4/28  
横浜マチネー

Program Notes

## ブラームス 大学祝典序曲 作品80

その作風から生まじめな印象を受けるヨハネス・ブラームス（1833～97）であるが、彼がしばしば独自のユーモアのセンスを発揮したことは見逃せない。この〈大学祝典序曲〉からもブラームス一流の茶目っ気が伝わってくる。

1879年、すでに交響曲第1番や第2番、ヴァイオリン協奏曲といった傑作群を世に送り出していたブラームスのもとに、ドイツ（現ポーランド）のブレスラウ大学から名誉博士号授与の申し出が届く。かつてイギリスのケンブリッジ大学から名誉音楽博士号の授与を打診された際には、船旅や儀礼的な諸事を嫌って辞退したブラームスだが、今回は面倒な義務を伴わないとあって、これを受諾した。

翌年の夏、ブラームスはオーストリアの避暑地バート・イシュルに初めて滞在する。この地で、ブラームスはブレスラウ大学への返礼として〈大学祝典序曲〉の作曲に取り組んだ。学生生活を反映した作品にすべく、ブラームスは学生歌を取り入れようと考え、「ドイツ学生のための酒宴歌集」に収められた4曲が作中に用いられることになった。

曲は弦楽器による歯切れのよい序奏で開始され、やがてトランペットにより、「われらが立派な校舎を建てた」の旋律が厳かに演奏される。力強く高潮した後、ヴァイオリンが流麗でのびやかな“祖国の父”の旋律を奏でる。続いて現れるファゴットによるおどけた旋律は、“新入生の歌”（かつて日本でも「大学受験ラジオ講座」のオープニングテーマとして親しまれていた）。各主題を展開させた後、終結部では“さあ、愉快にやろう”の旋律が現れ、にぎやかに曲を閉じる。酒宴で歌われる学生歌が、シンバルやトライアングル、大太鼓を伴った壮大な管弦楽曲へと華麗な変身を遂げた。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1880年／初演：1881年1月4日、ブレスラウ／演奏時間：約10分  
楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル）、弦五部

## コルンゴルト ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品35

音楽史には数々の神童たちが登場するが、「モーツァルトの再来」と称えられたオーストリアのエーリヒ・ヴォルフガング・コルンゴルト（1897～1957）もそのひとり。早くも9歳で作曲したカンタータを聴いて、マーラーは「天才だ!」と驚嘆した。コルンゴルトは10代からウィーンで名声を築いていた。

ところがナチスの台頭により、ユダヤ系のコルンゴルトは1934年にアメリカへ逃れ、ハリウッドで映画音楽の作曲家に転身する。そして、アカデミー音楽賞を獲得するなど、この分野に大きな足跡を残した。戦後、コルンゴルトは芸術音楽の世界に帰ってくる。コルンゴルトにヴァイオリン協奏曲の作曲を頼んだのは友人でもあった名ヴァイオリニスト、ブロニスラフ・フォーベルマン。しかし晩年のフォーベルマンの不調もあり、47年の初演はヤツシャ・ハイフェッツが担った。初演は大成功を収めたが、映画音楽が素材に用いられていることから、ある批評家は曲を「ハリウッド協奏曲」と揶揄した。映画音楽を一段下に見たような発言だが、現代の感覚からすると、映画音楽風であることはむしろ肯定的にも感じられるのがおもしろいところである。

**第1楽章** モデラート・ノビレ 冒頭の甘美な主題は映画「<sup>さばく</sup>沙漠の朝」（1937）の音楽が転用されている。中盤では映画「革命児ファレス」（1939）の音楽にもとづくのびやかでメランコリックな主題が独奏ヴァイオリンで奏でられる。

**第2楽章** ロマンズ ゆったりとした陶酔的な主題による緩徐楽章。映画「風雲児アドヴァース」（1936）の音楽が使われている。

**第3楽章** アレグロ・アッサイ・ヴィヴァーチェ 独奏ヴァイオリンの華麗な技巧で彩られたフィナーレ。映画「放浪の王子」（1937）の音楽を素材に用いて、ユーモアをにじませつつエネルギー溢る楽想を展開する。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1945年／初演：1947年2月15日、セントルイス／演奏時間：約24分  
楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、グロックンシュピール、シロフォン、ヴィブラフォン、鐘、ゴング）、ハープ、チェレスタ、弦五部、独奏ヴァイオリン

4/26  
名曲4/28  
横浜マチネー

Program Notes

4/26  
名曲

4/28  
横浜マチナー

Program Notes

## ベートーヴェン

### 交響曲 第4番 変ロ長調 作品60

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)の交響曲第4番は、前作の交響曲第3番〈英雄〉に比べればぐっとコンパクトで軽快な作品だ。第3番〈英雄〉を特徴づけるのが「巨大さ」だとすれば、第4番の持ち味は「機敏さ」。フルートは1本のみという管楽器の編成はベートーヴェンの交響曲では最小で、モーツァルトやハイドン時代のオーケストラに立ち返ったかのよう。

1806年9月、ベートーヴェンは支援者であるリヒノフスキー侯とともにオーバーシュレージエンに領地を持つオッペルズドルフ伯爵の居城を訪れた。熱心な音楽愛好家であった伯爵は自らのオーケストラを持ち、ベートーヴェンの旧作、交響曲第2番を演奏させて作曲家を歓待した。ベートーヴェンは作曲中だった交響曲第4番を伯爵に献呈し、報酬を受け取っている。翌年3月、交響曲第4番はロブコヴィツ侯爵邸で私的に演奏され、その後、11月に公開初演された。

**第1楽章** アダージョ〜アレグロ・ヴィヴァーチェ 静かにうごめくような弦楽器の動きから、次第にはっきりとした形が浮かび上がってくる入念な序奏は、まるで音のビッグバン。序奏でいったんクライマックスを築いた後、生命力みなぎる主部に猛然と突入する。

**第2楽章** アダージョ ベートーヴェンの交響曲のなかでもとりわけ精妙な緩徐楽章。しなやかな旋律が奏でられる背景で鋭い付点リズムが反復され、柔和さと鋭利さの絶妙のコントラストが描き出される。

**第3楽章** アレグロ・ヴィヴァーチェ ゴム球が弾むような主題で勢いよく始まるスケルツォ。トリッキーなリズムが痛快。

**第4楽章** アレグロ・マ・ノン・トロppo 小刻みな弦楽器のパッセージで開始され、スピード感とユーモアにあふれたフィナーレを築き上げる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1806年／初演：1807年11月15日（公開初演）、ウィーン／演奏時間：約34分  
楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部